

# ミャンマーの伝統芸能

写真・文  
兵頭千夏  
Chinatsu Hyodo



夜を徹して繰り上げられるザッポエ

ミャンマーの芸術が花開いたのは、多民族国家において一八八五年まで続いたビルマ族最後の王朝の頃。近隣諸国の影響を受けつつ宮廷から生まれた芸能の数々は、国の保護を受けている。

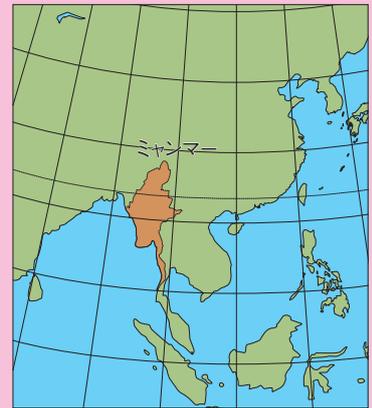
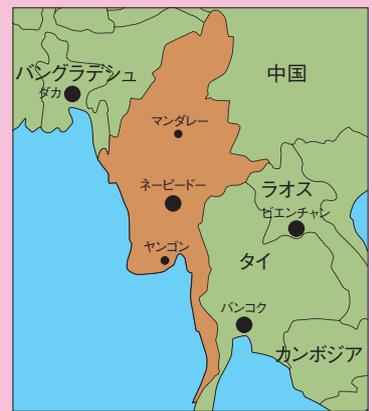
ミャンマーの文字のように丸く優雅に踊ることを美とする舞踊、ミャンマー芸術の集約と言える糸操り人形、そして、あらゆる行事や儀礼、芸能事に必要不可欠なオーケストラ「サインワイン」を紹介しよう。

舞踊は大きく二種類に分けられる。仏教行事で踊られるものとそうでないもの。たゞビルマ族のほとんどが敬虔な仏教徒であることから、仏教と芸術は深く関わりあっているといえる。

仏教のお祭りには、男性ダンサーを座長に歌や踊り、芝居やお笑いを交え、明け方まで行なわれる「ザッポエ」の仮設小屋が建つ。その逆に女性の踊子を座長とした「アニエイン」もまた仏教行事と一緒に見られる芸能だ。しかし現在は、庶民の娯楽も増したことで人気は落ち、さらに警備上の問題から都会での上演は減る一方である。息子の出家を喜ぶ母親を表現した「ビョーアカ」、農耕に関する踊り「チエーレーアカ」、愛を語りあう男女ペアのダンス「ナパートワ」、大勢でタイミングを合わせながら踊る「イエインアカ」、鬼や鳥や猿、錬金術師の踊りなど、多様な舞踊が数々の行事、儀礼で踊られている。



人形の動きに似せたポーズが多いことから、一緒に踊ることも



彫師は衣装で隠れても人形の性別まで製作する



小さな人形という意味のヨウッター。錬金術師が一番難しい

糸操り人形のヨウッターは他国の影響を受けない、ミャンマー固有の芸能。子ども向けと思われがちだが、王様に愛された糸操り人形は大人が楽しむものだ。

彫師により製作された人形は四五〜七〇センチの大きさ。命を吹き込む人形遣いの手にかかれば約二三本の糸を操ることによって一〇〇以上の動作をするという。

人形劇団の演目はオーケストラの生演奏で始まる。地球が自然現象により破壊され、そして再び新しい世界が創世されたことを演奏だけで表現し、そして舞台の幕が上がると、ここから糸操り人形が登場する。

まずは巫女の人形が上演を守ってくださるよう祈りを込めて操られ、そして動物が集う。馬、猿、鬼、龍、鳥神ガルーダ、象、トラ、最も難しい人形と言われる錬金術師という順番だ。錬金術師は魔法の杖を用いて不老長寿の薬を作り、森の中を飛び回る。この人形が一番難しく、錬金術師の技を見れば人形劇団の実力が分かるといわれる。

最後の演目は二八種類以上の人形を用いた、一〜二時間の物語。内容は、悟りを得るまでに五五〇回生まれ変わったお釈迦様のような心中物は御法度だ。けれど歌手が感情豊かに唄い上げ、愛を語り合う男女のシーンが大きな山場となり、そしてハッピーエンドを迎え、幕が降りるのだった。

残念なことに人形劇団は減り続け、滅多に見られない芸能になってしまっている。



指揮者であるサイン奏者を中心に演奏される



精霊信仰の儀礼にもサインワインは欠かせない



太鼓が環状に吊りさげられ、サインはメロディーを奏でる

伝統的オーケストラ「サインワイン」抜きにしてミャンマーの芸能を語ることはできないだろう。仏教の祭りや得度式、精霊信仰の儀礼、先に述べたザツポエ、アニメイン、人形劇団と、あらゆる場面に欠かせない。頼まれればどこへでも移動し演奏するこの楽団は最低八人で構成されている。サインワインの指揮者となり演奏を進行していく「サイン」（またはパツワイン）が中央に位置する。大小一七〜二二個の太鼓を環状にヒモで吊り上げ、両手を駆使して直接叩く。パサという糊状のものを太鼓の上面に練りつけてチューニングし太鼓がメロディーを奏でるのだ。

サイン奏者の右側には主旋律を演奏する楽器が配置される。一八〜一九個の真鍮ゴングが環状に並ぶ「チーワイン」は高音を響かせ、その後ろには「マウン」という一七個の黒いゴングが四角い木枠の中にはめ込まれている。低音だがまろやかな音を出す。右端にはリードのある笛「フネー」がくる。日本のチャルメラに似た音の管楽器だ。フネー以外は音を自由に伸ばすことができないことから重要な役目を担っている。

サインの左側にはリズム楽器が並ぶ。すぐ隣の「パツマジヤウン」はピンサユーパーという龍にも似た聖獣の装飾に大きな両面太鼓の「パツマ」がぶらさがり、「サクウン」と呼ばれる太鼓が横に寝かされ、「チャウロンパツ」という大小六個の太鼓が床に置かれている。計八個の太鼓を手で叩き



男女のペアダンスを操る文化大学の学生



長い裾をさばきながら優美に踊るのがミャンマーの舞踊



舞踊5～10才部門で競う少女たち。伝統芸能コンテストにて

観客席からは背中を向ける格好で演奏する。その隣に「リングイン」、いわゆるシンバルがいて、後ろにばちで叩く太鼓の「スライダー」が。スライダーの右側には「スィー・ワ」というテンポを決める奏者が座る。そしてサイン奏者の後ろ、もしくは前に歌手が立つ。もちろん場所の関係でこのように配置できないこともある。

指揮者であるサイン奏者の気持ちひとつで曲の雰囲気はがらりと変わってしまう。さらに熟練したサイン奏者になると即興的にアレンジし、二度と同じように演奏することはないとまで言われている。サイン奏者は尊敬され王朝時代などは領主の地位を与えられていたほど。

早いテンポで演奏され大変賑やかなサインワイン。お祭り好きのミャンマーの人はサインワインの音を耳にするとムズムズしてくるという。娯楽の少なかった頃、サインワインが「特別な事」を知らせてくれたからなのかもしれない。

政府は伝統芸能を守るべく文化大学で舞踊、糸操り人形、サインワインを教えている。そして毎年国をあげて行われる伝統芸能コンテストの種目に取り入れてもいる。これらの伝統芸能が途絶えることなく継承され続け、もつと世界中の人たちに知ってもらえたらと、現地で二年間調査した私は思わずにはいられないのだった。

(ひょつどう) ちなつ／写真家